

長江の南岸、ここは土地が肥沃で気候が温暖湿潤であるゆえ良質のもち米ができる恵まれた地。また、水が綺麗であるゆえ魚が美味しいといわれる。かつて人々は川辺に沿って暮らすようになり町が作られ、古鎮（ごちん）と呼んでいる。（古鎮は「古い町」のこと。）

先人の多くが、戦乱を避けて中原からの江南に移動し、独特の江南文化が醸成されてきたのである。白壁の家並み、町を縦横に走る水路、そこに架かる太鼓橋と行き交う小舟。画などでよく目にするこの風景をマルコポーロが「東洋のベニス」と称したのもなすける。この中に一人の酒造りの名人がいたという。

◎酒造りの神欠かせない人物「杜康」

日本において、酒造りを担う長を杜氏という。これは、もともと「刀自」という文字が当てられていた。「刀自」とは、家事全般を仕切る主婦のことで、それに対して働く男をさしたものは「刀漉」と呼ばれた。そして、後に酒造りの神と呼ばれた「杜康」の字が当てはめられ、現在の「杜氏」となったといわれている。史実によれば、この酒造りの神と呼ばれる、「杜康」が、中国において初めて酒を造った人物だという伝説もある。

この酒造りの神「杜康」の時代は三国時代、呉にあたるこの地に、杜康は政争を逃れるために、河南から江南の地に下ってくる。刺客が近づき慌てた杜康は、焼酎を焼けた米飯の失敗作から、なんとお酒をつくるのである。失敗してしまっただけのまっすぐに焦げたお米で造ったお酒。それが以外

にも口当たりまろやかにして華やかな芳香を放った。この酒に刺客や、山の妖怪までもが虜になったという伝説がこの呉の地に残る。そしてその酒は「杜康」の名をとり、「黒杜酒」と呼ばれたのである。

◎黒杜酒と乾隆帝の出会い

酒造りに恵まれたこの江南の地の醸造酒の歴史は古く、この伝説の黒杜酒を造る醸造元も多くあったといわれている。この黒杜酒の名を国内中に広めたのが清の時代、皇帝乾隆帝と黒杜酒の出会いといわれている。

乾隆帝が皇太后と江南を訪れたときのこと。皇帝がなんともいえない良い香りを感じた。どこからともなくたまたまその香りにある醸造所を発見したのである。

そこに辿り着いた皇帝が「これは何の酒か？」と聞くと、その醸造所の杜氏が応えた。「黒杜酒です」と。漢詩作りの好きな乾隆帝はこの黒杜酒を味わい

「香漂十里外、味回三月余」

と詠い、以来、この黒杜酒は毎年朝廷へ捧げられるようになったという。

◎江南の銘酒「黒杜酒」

この江南古鎮の町並みを見、伝説を聞けば、黒杜酒がどんな味かわいなのか早く知りたくなってくる。妖怪をも魅了し、あの乾隆帝が誘われた香りとは。そして口内にと

どまる優美な余韻とは。今この黒杜酒を醸しているのは残念ながら1社のみである。原料に使用される糯米には現在の健康ブームの中、注目を集める黒米が使用される。玄米の色が黒色で果皮・種皮の部分に紫黒色素（アントシアニン系）を含んだコメで、精米すると米が紫色になるため、紫米とか紫黒米とも言われる糯米である。

この黒米は、おはぎの起源で古くからお祝いの米として珍重されてきた糯米である。この栄養分は白米と比べ、たんぱく質・ビタミンB1・B2・ナイアシン・ビタミンE・鉄・カルシウム・マグネシウムなどが豊富に含まれている。

そしてこの効用は中国では明の時代の「本草綱目」にも黒米は滋養強壮に優れた血作用があると記されている。薬膳料理にも古くから使われていることから薬米の別名もあるほどだ。

また、不老長寿の米として中国歴代の皇帝に献上されたことから貢珍米として喜ばれてきた。

◎黒杜酒は健康酒でもある

この黒米からつくられる黒杜酒もまた産後の造血作用（補欠効果）、虚弱体質にももってこいのお酒といわれ珍重されてきたこともなすける。

その黒米で仕込まれたらるみに、あの時「杜康」が失敗した黒米とお酒を加え、2次の発酵をしていくのである。お酒を加えることで発酵を途中で止めもろみの中の糖度を残し、様々なアミノ酸を含んだ黒杜酒へと仕上がっていくのである。

多くの紹興酒がカメラルを使用し、着色を施すのに対し、この黒杜酒はお米を炭化させて色付けをしていることで、炭と同じ身体の毒素を吸着し体外に排出させる作用があると聞く。なんと優れた酒なんだろうか。

目の前に現れたその黒杜酒の色はまさに漆黒の深い色合い。と共に漂うなんとも芳しい香り。香りに酔いしれながら一口を呑む。口の中に広がる香と深い味わい。まさに余韻が口に留まる。伝統として受け継がれた味に加え、洗練されたモダンさも感じる。

長い歴史の中で、単なる致酔飲料としての側面だけではなく、薬としての効用をよく求めるこの地で、多くの人々がこの栄養価の高い黒杜酒を贈答用として用い、今また舌の肥えた上海の人々を魅了しているのも頷ける。

広い国土と長い歴史を誇る中国にはどれくらい宝酒が存在しているのかわかるか。この江南の銘酒黒杜酒は私の宝酒の一つになったのは間違いない。

